

Column 「静かさ」というカミ

山尾 春美



今我が家のまわりの森はヒヨドリやシロハラやジョウビタキなどの冬鳥たちが賑やかに鳴き交わしている。そして鳥たちが陽気に飛び交っていても冬の森は静かさに包まれている。北西風が吹き荒れアラレが舞うような南の島とはとてもいえない日も多いがいったん風が止むと一年中常緑の照葉樹の森はしんとした静かさに満ち毎日同じ姿であるのに眺めても眺めても眺め飽きることがない。

三省さんが強烈な自我意識と鋭すぎる感性を持って生まれ、暗く苦しい青春時代を過ごしながら廃倅のように仏教と出会いインド哲学に導かれ、そして屋久島の暮らしを通してアニミズムに辿りついたことに運命というものを私は感じている。三省さんは強い荷立ちや不安を抱え込みやすい人（特に若い頃は）であったがゆえにより深い安心を求めた人であったと思う。屋久島の森の静かさは三省さんをどれほど癒したことだろう。三省さんにとっては「静かさ」こそがカミそのものだったと最近つくづく思うのである。

2001年夏三省さんが亡くなった直後の9月11日に同時多発テロが起こり、そ

の10年後の2011年3月11日に東日本大震災が起き原発事故が起こった。三省さんが亡くなった後の14年の間に世界はより大きな不安な時代に入ってしまった。三省さんが生きていればこの時代をどのように見どのような希望を綴っただろうかと思うが、私は三省さんは変わらず静かなカミを見出し出会うことを書き続けたのではないかとこの頃は思っている。私たちの中に不安が強まれば強まるほど静かなカミが必要であり、カミは森の傍に住もうが街に住もうが会いたいと思えばどこにでも見い出すことができ共に居続けてくれるものだからである。（三省さんはプランターの草花にもカミは宿っているといっていたし、日の光はどこにでもこぼれてくるし、青空の奥にはそれこそ深い静かなカミがいる）そして究極の願いである「安心」の世界へ導いてくれるものだからである。今私たちは私たちの中の不安をじっと見つめ続ける力を持たなければならないと思う。そうでなければ私たちはとてつもない破壊への道に引きこまれていきそうな気がする。今こそ「静かさ」というカミが必要な時だと私は思える。

森の傍らには梅の花が咲き出している。三省さんも愛した梅の花を一枝二枝手折ってきて家の中の花入れに活けてみると梅の花の「静かさ」はまさしく清らかなカミそのものである。私はそんなカミに救われて一日一日生きているような気がしている。

2014年度ゼミナール報告

自主ゼミ 「東樹句会」

講師：堀本 裕樹（俳人）
殿谷 みな子（会員）

毎月、各自が兼題二句と自由題一句を持ち寄っての句会もそろそろ一年。私も含め、ほとんどの方が初心者ですが、堀本先生の一句一句へのていねいなご指導を受けながら、楽しい交流の場になっています。俳句の十七音が、日々の暮らしを新鮮なものに変えてくれるような気がしています。



自主ゼミ 『ブッダのサイコセラピー』を読む 「目覚めて生きる：ブッダのサイコセラピー講読ゼミを終えて」

ファシリテーター：立花 蓉子（心理学者）

ゼミは瞑想編で終了させていただきました。本書の圧巻は何よりも豊かな症例にあります。

苦しみを抱えた患者が見事に変容して行きます。無意識に繰り返して来た思考や行動パターンの誤りに気づくことで、それに縛られていた自分から解放され新たに生きる道を選んで行くプロセスが、鮮やかに描かれています。

本書を通じて目覚めて生きたブッダの足跡が少しでも見えて来たら幸いです。



調査研究事業 2014年度 調査研究事業 コロキウム

井上 喜行（運営委員）

●毎月第3火曜日（人類の未来コロキウム）
複雑系科学の基礎として「フェルマー最終定理の中学生証明」、未来予知経済学の開発と戦争防止などを主な研究テーマとする自由参加研究会です。最近では2014年10月に発行された海野和三部学長の新著『宇宙マンダラ』をテキストに、自由な論議を展開しています。

●毎月第4木曜日（太陽熱発電コロキウム）（8月・3月は休み）
ここ数年、再生可能エネルギー世界展示会に出展してきた集熱型太陽熱発電について調査研究しました。今年度は、海外で開発されているトラフ型、リニアフレネル型などの研究や、トラフ型に小型家庭用発電機の内容を使用したフレネル型より安価な発電システムについて、大木健一郎先生を中心に研究発表しました。
27年度は火曜日のコロキウムに統合予定です。
主宰：海野和三部（東京自由大学学長）／第4木曜日司会：井上喜行（東京自由大学運営委員）

事務局だより

渡辺 恵実（事務局員）

東京自由大学の事務所には書籍販売コーナーがあります。連続シンポジウムをまとめた書籍『仏教は世界を救うか』をはじめ、学長、理事長執筆の書籍など数々あります。講座にご参加の折に、また、神田にいらした際にお寄りください。なお、事務局業務は火、金曜の13:00から18:00となっております。

●http://jiyudaigaku.la.coocan.jp/ ●E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.24 2015年（平成27年）3月20日発行

編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: 03-3253-9870
デザイン（有）アンビエンス / 印刷（株）ペクトル

NPO法人 東京自由大学 Newsletter

2015.3.20 Vol.24

震災解説事典Ⅱ ～シンポジウム～

「3・11から未来に届ける言葉の創造」

2014年10月4日（土）

辻 信行（運営委員）

2年間にわたって開催してきた、特別企画「震災解説事典」の最終回となるシンポジウムが、去る2014年10月4日（土）に開催された。パネリストの池内了さんと高橋源一郎さんが、それぞれの視点から問題提起をし、それに鎌田東二理事長が応じつつ、鼎談がなされた。震災をめぐるコアな問題から、今日の様々な社会問題との関連性まで、奥行きのあるシンポジウムとなった。

最初に登壇した池内了さんは、「無責任な言葉が行き交う原発再稼働」と題された講演のなかで、主語があいまいな「責任」という「無責任な」言葉が世間に飛び交っており、それが原発問題のベースにあると指摘。そのうえで、私たちが忘れてはならないこととして、①原発の反倫理性 ②原発の事故確率 ③原子力ムラの人々の無責任さ ④大飯原発の画期的判決 を挙げた。①は、過疎地や労働者、住民や未来世代へ、原発を押し付けることが反倫理的であるとの指摘。②は、原発の過酷事故が10年に一度の高い確率で起きているという事実。③は、政府・官僚・業界・マスコミ・専門家（原子力、放射線防護学）からなる原子力ムラの人々が、最終的に責任を逃れようとする実態について。④は、大飯原発の運転差止判決が、憲法に対する「人格権」と科学的論点のみられる画期的判決であると論じた。

次に登壇した高橋源一郎さんは、3月11日に「今日で世界が変わってしまう」と実感したと言い、震災後最初の一週間は原発を止めるような良い方向に変わると思っていたが、いまは「ここまで社会全体が悪化するとは思わなかった」という心境であると語った。高橋さんは、文化人類学者の辻信一さん（「震災解説事典 第一章」に登壇）と共同で行っている「弱さ」の研究を紹介し、認知症の老人を自由に生活させる施設や、宿題も試験も存在しない学校など、「弱さ」を基盤にしたオルタナティブなコミュニティを自分たちでつくり、社会に認めさせることが、これから大切になってくると指摘した。また小説家として、「21世紀は文学の言葉でいこう!」と提言。「文学の言葉は、物事を一方的に否定せず、矛盾しているけれど自分の思想の敵対者を愛してしまう。だからぼくは、朝日新聞の論壇時評も文学の言葉で書いて、政治の言葉に代わるオルタナティブとして立ち上げようとしている」と語った。

鎌田理事長は二人のパネリストの話を受け、「平成」という年号が発表されたとき、これから始まる時代が「平」には「成」らず、中世的な戦乱の世になると直感したとスパイラル史観を披露。実際、平成に発生した阪神淡路大震災と東日本大震災では、心のケアにおいて大きな違いが



パネリスト 池内 了（宇宙物理学者・天文学者・総合研究大学院大学前理事）
高橋 源一郎（小説家・文芸評論家・明治学院大学教授）
司 会 鎌田 東二（NPO法人東京自由大学理事長・京都大学こころの未来研究センター教授）

存在し、前者では盛んに行われたが、後者では遅れていることが問題であると指摘した。また、地球の問題を地球上から考えていては解決できず、宇宙の問題から民間信仰の問題までを串刺しにしてゆく視点が必要であると主張した。

池内さん、高橋さん、鎌田理事長の鼎談では、震災問題で露見した「無責任な言葉と態度」を追及してゆくと、アジア・太平洋戦争の敗戦やその基盤となった明治維新の薩長同盟と帝国主義的植民地支配の構造、さらには「国民国家」の作られ方・運営や維持のされ方、そこにおける人々の生き方やマインドセット、それらすべてを貫いていることが分かるという包括的な議論がなされた。そして現在トピックの問題である、①原発の問題 ②ヘイトスピーチの問題 ③大学の問題 これらすべてが、同根・同一構造で連鎖しているという指摘がなされた。

終始、歴史を変えてきたのは少数派であるという事実を目に向け、自分たちがオルタナティブな社会を創造してゆくの、という気概に溢れたシンポジウムになった。最後に鎌田理事長は、自身が網膜剥離で入院中に、石牟礼道子の『苦界浄土』を耳から聞いて感動した経験を話し、「語り」の持つ力が、震災後の社会の原動力になり得ると話した。

「震災解説事典」は、これで全章の講座が終了しました。いまだにご登壇いただいた全ての講師のみなさまと、ご参加いただいた皆さまに厚く御礼申し上げます。また「震災解説事典」は、書籍化に向けて準備が始まったところです。続報をお待ちください。

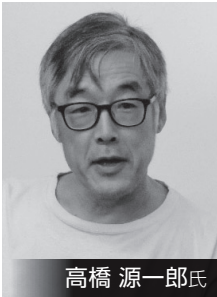
お詫びと訂正

Newsletter Vol.23の「震災解説事典 第九章 震災と〈東北〉」の報告文に、「〈東北〉、そこは稲作ナショナリズムにより穀倉地帯化された植民地。」とあるのは、「〈東北〉、そこは稲作ナショナリズムにより穀倉地帯化された宗主国と植民地の間の場所。」の誤りでした。講師の山内明美さんと読者のみなさまにお詫び申し上げ、訂正いたします。

■編集後記

岡野 恵美子（副運営委員長）

今号はビッグイベント「三省祭り」、震災解説事典のシンポジウムなど盛り沢山の行事が続いたため増ページとしました。東京自由大学の意欲溢れる活潑な活動報告を楽しんでゆっくりと読みいただければ幸いです。来年度は神田の会場で講座、ゼミを開催する最終年度となりますが、充実した質の高い内容のカリキュラムを準備しておりますのでご期待ください。なお第2世代が新たな展開で2016年度からも東京自由大学の活動を力強く継続します。詳細は来年度末にはお知らせしますので、ご支援をよろしくお願いいたします。



高橋 源一郎氏



池内 了氏

自主ゼミ 民俗舞踊の身体研究会

鳥飼 美和子（運営委員長）

2014年度の民俗舞踊の身体研究会は、夏合宿のオプションで、早池峰大償神社のご造営勸進神楽見学が一番大きな催しでした。大償神社、大償神楽の皆さまに感謝いたします。
ご指導の須藤武子先生は、一時の身体の不調を乗り越えられ、さらなる情熱をもって綾子舞の歌や舞に凝縮された中世の文化、それを伝承して下さった先人の魂を語り伝えて下さいました。

自主ゼミ 莊子読書会

岡野 恵美子（副運営委員長）

講師・木村真呂先生（荘子研究家）のご都合で、残念ですが来年度から読書会は中止となりました。長期間、荘子ゼミを続けてくださった木村真呂先生に心より感謝申し上げます。

第1回:10/18(土)「戦争と霊性 総論」

講師: 橋爪 大一郎氏 (社会学者・東京工業大学名誉教授)

戦争と「霊性」の関係について、ユダヤ教・キリスト教・中国の宗教・日本神道を例に挙げて、お話をいただきました。

ユダヤ教には、そもそも「靈魂」・「聖霊」という観念が存在しない。敵の命を奪っても、それは神が決めたことだから問題はない。したがって、敵を供養する発想も鎮魂の発想も存在しない。人間は徹底的に、神の被造物である。いわば唯物論に近い発想である。

キリスト教は「政治」と「宗教」は別ものと考える。戦争は、政治を担当する世俗国家が行うことで、「霊性」は戦争と関係ない。

中国では、何よりも「政治」が重要である。政治とは人間が人間を支配すること。

第2回:12/6(土)「戦争の民俗学 ~無名人の力」

講師: 酒井 卯作氏 (民俗学者)

酒井先生は大正14年生まれで89歳。戦争に巻き込まれた最後の世代です。19歳の時、徴兵され長崎の歩兵部隊に入隊した。先生は今まで、人前でほとんど戦争の話をしたことがないそうです。なぜなら、「戦争の話をすると、自分が犯罪者のような気分になるし、また、周囲の人々も自虐史的な内容をあまり聞きたがらないと思っていたからだ」と、おっしゃってありました。

戦争の生々しいお話が続きました。爆撃で飛び散った肉片を箸で拾い集めたこと。朝鮮人に対する差別意識のこと。3月10日の東京大空襲後の死体処理のこと。中国での日本人の残虐行為のこと等々。

雑兵は先に死ぬ。指揮官は後で死ぬ。雑兵は雑草のようなもので、踏まれても誰も泣かず、物の数に入らない。戦死しても問題にならない。「肉弾三勇士」のよう

第3回:1/31(土)「近代西欧思想、キリスト教と戦争 ~一神教は非寛容か?」

講師: 小原 克博氏 (宗教学者・牧師・同志社大学教授)

9・11以後の世界はかつてとは違う。第一次世界大戦のさなか、英仏をはじめとする西欧諸国がアラブの大地の身体を切り刻むように国境線を引いた。宗派を超えて部族が共存していたシステムが、イラク戦争以後は解き放たれ、混乱を招いている。国際社会で日本の平和主義は簡単には受け入れられない。「戦争反対」を単純に繰り返すだけでは自己満足にすぎず、悪としての戦争に対する正戦論のロジックを理解することが抑止力につながる。中東紛争も西欧列強の植民地支配や二枚舌外交がもたらしたもので、宗教が問題視されたのは長期化の結果だ。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の長い共存の歴史が徐々に破壊されて悲劇となった。一神教が対立・衝突を避けられないわけではない。古く宗教は供犠を伴ったが、犠牲を捧げない宗教として始まり、イエスの非暴力思想に従う初期キリスト教の平和主義は徹底していた。世界大戦の殺戮を経て登場した西洋の現代思想は、犠牲のシステムに対する批判から出発している。近代国家は人間の生死を管理、支配し、国家のための犠牲が尊ばれるシステムの構築に至る。宗教とナシ

第4回:2/28(土)「聖戦思想とは何か? ~イスラームの深層を探る」

講師: 保坂 俊司氏 (比較宗教学者・中央大学教授)

イスラム国による日本人人質殺害事件に対する世間の関心が、急速に薄れつつある中で行われた。保坂先生は、まず桃太郎伝説を手掛かりに聖戦思想を検討。一方的に鬼たちを征伐し財宝を略奪して帰る行為は、聖戦思想に通じると指摘。

日本には歴史的に「征伐」や「討伐」といった言葉があり、これらは「聖戦」と並べて考えられる。たとえば征夷大將軍の「征」の字は、天皇の軍隊である証で、天皇の命令さえあれば、その戦いは正当化された。この論理は朝鮮征伐、日清日露戦争における「神軍」「皇軍」へとつながってゆく。

日本語で「聖戦」と訳されるイスラームの「ジハード」は、本来「奮闘努力する」という意味で、「宗教・宗教生活のために努力する」という意味も含む。そしてジハードを宣言できるのはカリフと決められていたが、カリフ制衰退後は、一定の宗教的合理性があれば発せられるようになり、乱発されている。

「神」も「霊性」も登場しない。したがって全ての権威は皇帝が独占する。

日本神道には古来、死の穢れの考え方があり、死者は黄泉におもむく存在と考えられていた。したがって穢れた存在を神社に祀ることできないと考えていた。幕末、平田篤胤が「英霊」(穢れなき霊)を発見する。それが、招魂社・靖国神社・護国神社を生み出した。とくに国事殉難者は、すぐれた霊、「英霊」となって、国の行く末を見守るとされた。それが軍国主義に利用されることになる。

橋爪先生ならではの壮大なお話でした。

な話もあるが、そういった話は特別で、実際は雑兵が何人死んでも新聞記事にはならない。偉い人が死ぬと新聞記事になる。しかし死んだら家族が悲しむのは同じだ。兵隊の息子が死んだ時の親の悲しみは雑兵も将校も変わらない。死の悲しみは偉くても偉くなくても変わらない。

民俗学の基本的な考え方は、人間がいかにしたら幸福に生きられるか、をゴールにする。庶民が平和に暮らすにはどうしたらいいかだ。

「8月15日は日本晴れだった。もう逃げ回らなくていい、もう死ななくてよいのだ」と、酒井先生はしみじみと思ったそうです。

ヨナリズムでは殉教と自己犠牲は容認され、他者への暴力も肯定されて戦争を支える。国家に犠牲を捧げるシステムは、現在も存続している。犠牲を求める宗教やナショナリズムにどう抵抗できるのか。近代の国家体制下では、宗教は伝統を背景に犠牲と闘争を超克する道を求める必要がある。3つの問いに応じよう——①キリスト教が戦争を起こしたのか——ローマ帝国という権力や近代のナショナリズムと結びついた歴史的経緯の問題で、常に好戦的であったわけではない。②一神教は多神教より非寛容か——日本における言説は相手の本当の姿を知らずにつくられた偶像、他者に対する暴力の温床となる危険を踏まえ、議論の仕組みから考え直すべきだ。③犠牲のシステムを引き継いだ近代国民国家は暴力のコントロールに成功したのか——自らコントロールできないくらい暴力を拡散させてしまっているのが世界の現実である。

現在のイスラム国によるジハードは、「グローバル・ジハード」や「ローンウルフ・ジハード」など、拡大解釈されたジハードであり、これらは近代の西洋文明への復讐・対抗の精神に根差しており、ヨーロッパの植民地支配が端緒となっている。またイスラム国は、ワッハーブ派が採用しているコーランに基づいた行動原理を持っており、ワッハーブ派はサウジアラビアと密約で結びつき、その背後にはイギリスのバックアップがあるなど根が深い。

S・ハンチントンの『文明の衝突』は、アメリカ中心の発想であるものの、中東がアメリカによって紛争の巣とされ、軍需産業の一大拠点になると予測している点など、大いに当たっている。

「アリ」の目コース】アリのように地域に根差し実践的な視点から世直しを考えるコース

9/21(日)「非電化のくらしとエネルギーの未来」

藤村 靖之 (発明家・非電化工房主宰)

「非電化の暮らしとエネルギーの未来」というテーマと違う話をしますとのことで、最初は「エネルギーとお金を使わなくても得られる豊かさ」をテーマとした非電化工房の紹介、ジンパブエの住居をまねた非電化カフェを5,000万かかるところ70万円で作る話、発明は失敗してもたくさんの人が「やっぱダメじゃん」って喜んでもらえる話など。

2000年に、これからの自分の役割を第一に非電化、第二に仕事づくり、と決めた。今日は「仕事づくり」の話。

今、人々は仕事を人質にとられて罠にはまっている。金融、エネルギー、不動産に貢がされている。そこで自分たちで仕事を作ってみようと考えた。まず「自給自足大学」、第9期の人が「非電化パン屋」をやってみた。普通500万かかるのを30万でやった。手作り石釜でローンなし、大事なことは「ノーリスク」。「マザーアースニュース日本版」。電気・水道・ガスから切り離す「オフグリッド社会」「楽しい」という字の話……かなり過激な、でも、とても楽しい世直し講座でした。

「タツ」の目コース】第三の目で見えないモノを見る視点から世直しを考えるコース

12/20(土)「見えないモノを視る力」

高橋 巖 (シユタイナー研究家・元慶応大学教授)

高橋先生は、言葉を自身に巡らせてから発するように語った。龍の目から世の中を見、自身の心と向き合うことの大切さを示す中で、その方法として、「心の旅鳥」という7つのステップがあった。『(1)自分自身と親しくなる。(2)親しい人と親しくなる。(3)親しくない人と親しくなる。(4)縁のないところに縁を創る。(5)自分のためよりも人のために。(6)始めは芸術を通して。(7)人生の中で。』これを実践していくことで自身の感覚を外に開き、「見えないモノを見る力」を少しずつ手に入れていくこと、それが高橋先生の提案だ。講演を通して、霊的なことに感性を研ぎすまし、一瞬一瞬の心の動きを見て、霊的な瞬間に「命懸け」で生きてきた先生だから言える言葉が多くあった。しかし、世の中に溢れる言葉のレッテルに左右されず、自身と他者との邂逅を巡る心の動きを見て、焦らずゆつくりと自分の中に経験を沈めていくこと。それを実践してきた先生の大木のような佇まいが、最も雄弁であったのかもしれない。

10/25(土)「土を耕し、心を耕す」

塩見 直紀 (半農半X研究所代表) × 矢野 智徳 (NPO法人杜の会副理事長)

→塩見直紀さん
台湾、中国での「半農半X」の受容から、活動拠点の綾部について、大本教、グンゼ、植芝盛平、世界連邦都市、等の紹介があり「X」について、ワークシートを使って、問いかけがあった。1得意なこと2大好きなこと3人生のテーマの三つを記入することで、多様な「X」を探ってみせた。内山節の「修行と創造」、先哲の「場所が決まれば修行は始まる」、生命多様性社会から使命多様性社会へ等々、人生Uターンすれば「X」が見えてくる。

→矢野智徳さん
沖縄久高島での出会い、北九州の植物園での生い立ち、恩師の薦めもあり、久高の地力の痛みを写真にとり10年通った。造園業をやりながら、地理を学び、久高島・沖縄・日本列島を三つの相似形と捉え、飛行機から眺める空気の層にも感ずるところがあった。造園の仕事から、排水、水の流れを見て、地中の空気の流れがとどまると水の流れも悪くなることに気付いた。

地中の「空気と水の流れ」を写真に撮ったりして発表した。誰もやってないことだった。自然災害、松枯れ、ナラ枯れ、赤土流出……みんなコンクリの国土強靱化政策が国土の血管をつまらせて、白砂青松を失くしている。天空の気象予報と同じく、地中の気象予報も必要。土石流やゲリラ豪雨はみんな

1/17(土)「身体未来～からだの知り方」

内田 樹 (思想家・武術家・神戸女学院大学名誉教授)

奇しくも阪神淡路大震災20周年の日の講演となった。黙祷の後、内田先生自身の被災体験を交えながら、「平時」と「非常時」のロジックの切り替えが人にとってどれほど難しいかが話題になった。普段の生活が一瞬で崩れ去ってしまうような緊急時に、スイッチを切り替えられる人が持つ能力はなにか。それは「身体感覚のアラーム」である。論理的に思考することで生まれる理屈ではなく、身体が忌避する方向を避けることは人間にとって自然な能力のはずである。しかし、現代人がその部分を訓練なしで開花し、維持することは難しい。低刺激の空間で自分の感覚を研ぎすませる武道は、そのための訓練である。合気道で型を演じるとき、空間の粘り気を指先で感じ取り、抵抗の低いほうへと指を運んでいく動きは、その一例だ。

現代社会に生きる人間の多くは、鋭い身体感覚と危機察知の能力を構造的に閉ざしてしまう。「自分の生命力を高める物と人に近づき、低めるものからは離れていく」こと、そしてその個人の感覚への共感によって共同体がセンサーを分有すること。これからの世界で人が生き残るために、身体に向かい合うことの重要性を、内田先生は説いた。

地面の水と空気の流れに関連している。3.11で原発の恐ろしさに気付いたように、早く「水と空気の流れ」に目を向けてほしい。山梨の上野原で、中山間地と都会と行き来して、「半農半X」のような、ナマの空気を吸える生活が大事と思っている。

お二人の話は、世直し講座にピッタリの、「今二宮尊徳」といったお話でした。まともは多分に担当の個人的、恣意的な側面があることをお許しください。

11/15(土)「神田地元学の創造」

中村 紺哲 (現代版悉皆屋)

歌川広重の名所江戸百景「神田紺屋町」を映して、地元神田界限について解説、平賀源内、千葉周作、藍染め、竜閑川、神田古町……。中村さんのルーツは京都の和ろうそく屋で、関東大震災(大正12年)頃に「悉皆屋」を創業した。「悉皆屋」は今でいうコーディネーターで、いろいろな職人に仕事を振り分けて、誂え物(あつらえもの)を納める業。紺哲さんは「現代の悉皆屋」として、「暖簾」(のれん)をコレドにおさめたりしている。暖簾は応仁の乱以降、京都の町で普及したようだが百丈禅師にそのルーツがあるといわれている。現代インテリアとして再認識されて良いモノと考え、秋にはアムステルダムに行つて展示会やワークショップを行う。また、2008年頃、旧今川中学を利用して、街づくりイベント「エドエコ」を開催した。後半の質疑で、「わかもの」「ばかもの」「よそもの」が一緒になって、『隣人まつり』やら『町おこし歩き』などの提案もあった。

2/21(土)「蝶の翅、別の声」

吉増 剛造 (詩人)

吉増先生の教え子である、金順慧(キム・スネ)さんと川戸郷史さんがプレゼンテーションをし、先生がコメントをするという会だった。前半は島尾ミホさんとマヤさん(島尾敏雄の妻と娘)の2人が出演した映画『ドルチェ』、彼らが暮らした奄美の映像、画像を交え、奄美が育んだ感性が不思議な言葉とともに語られた。後半は小津安二郎の『東京暮色』のシーンを見ながら、小津映画を音を軸に見るという新しい視点を示された。

2人のプレゼンテーションは、吉増先生の言葉が織りなす空気の層の間を行ったり来たりし、掴んだと思ったら翻る鱗のようであったが、強烈な印象を参加者に残したように思える。その印象を言葉にするのは難しいが、会を貫いていたキーワードを取って挙げるのならば、「水」「島」そして「家族」であった。水が低きに流れるように、あるいは淵から溢れるように、高いところから降りてくる言葉、イメージ。そしてその水、言葉に囲まれ、分断される島、あるいは島を表象する人々。その人々のつながりと、隙間が作る家族。その全ての層を、吉増先生の言葉は蝶の翅のように、ひらひらと行き来した。その声は、私たちにとってまさしく別の声だったように思う。

特別企画

三省祭り2014「蘇れ! 神田川の〈カミ〉の力」

2014年11月16日(日) 報告

鳥飼美和子 (運営委員長)

1938年東京神田に生まれ、2001年に屋久島で他界した詩人・山尾三省。コミュニン運動の後、屋久島へ移住し土地を耕し、詩を書き、祈り、自然の中に溶け込むようなその生き方全てを通して、多くの人々に影響を与えた。三省さんの三つの遺言は、現在の日本や社会に対する予言的なメッセージである。

東京自由大学では、彼の生き方と遺した言葉を語り継ぐ催しを続け、2014年度は「神田川の水を飲める水に」という遺言、故郷神田に寄せる思いと、水や河川や土壌、環境の問題を取り上げた。

会場となったWATERRASは、三省さんの母校淡路小学校の跡地。三省さんと深い縁のある場所に私たちを繋いでくれたのは、「世直し講座・蟻の目」にも講師として登場してくれた中村哲氏、通称・紺哲さんである。今年は、紺哲さんはじめ、毎年ご協力いただく地湧社の増田圭一郎さん、野草社の石垣雅設さんのご協力もあって、一日を通しての催しで、その内容は縁が縁を呼んで編みあげられた織物のようであった。

第一部は、三省さんと屋久島で出会ったマクロビアン・料理家の中島デコさんに、「中島デコの発酵ライフ」としてトークと共に、豆乳ヨーグルトのレシピを紹介していただき、豆乳ヨーグルトを使った美味しい軽食をいただいた。準備や調理を受け持って下さったのは秋葉原の「こまきしょうどう」さんだ。

第2部のトークセッションでは、三省さんとの出会いによって、ライフスタイルを変化させ「ブラウズフィールド」を設けた写真家・執筆家のエバレット・ブラウンさんと中島デコさんに三省さんの思い出や、食と



第1部
トーク&ミニワーク「中島デコの発酵ライフ」
講師:中島デコ (マクロビアン・料理家・ブラウズフィールド)



第2部
トークセッション「蘇れ! 神田川の〈カミ〉の力」
パネリスト: 陣内秀信 (建築史家、建築家、法政大デザイン工学部教授)
矢野智徳 (造園家、環境再生医、NPO法人杜の会副理事長)
中島デコ (マクロビアン・料理家・ブラウズフィールド)
エバレット・ブラウン (写真家)
司会: 鎌田東二 (NPO法人東京自由大学理事長、京都大学こころの未来研究センター教授)



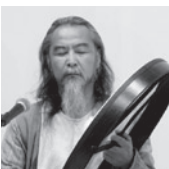
第3部
コンサート&ポエトリー・リーディング「おかえりなさい、三省さん」
コンサート: イ・ジョンミ、KOW、鎌田東二
ポエトリー・リーディング: 山尾春美、長屋のり子、高橋秀夫、松倉福子
音: 宇々地 + 野村雅美 + KOW

農業を結びつけた生き方、その根底にあるスピリットについてお話しいただいた。

テーマである河川の再生の問題では、都市における川の役割をゲスト講師の陣内秀信先生に、土壌と水の循環による自然環境の再生の実践活動の報告を造園家・環境再生医の矢野智徳さんに映像を使ってお話しいただき、日本の自然の緊急の問題が目に見えて迫ってきた。日本が潜在的に持っている自然と精神の豊かさをどのように復活させてゆけるのか、厳しい現状のなかで、一人ひとりできることを改めて心に問う時間でもあった。

夕闇が迫る第3部はポエトリー・リーディングとコンサート。宇々地さんの土笛や太鼓と野村雅美さんとKOWさんのギターの即興演奏が響くなか、北海道から来ていただいた三省さんの妹で詩人の長屋のり子さん、屋久島から初めて来ていただいた夫人の山尾春美さん、三省さんの友人で、今年のゲスト講師だった八百屋「ろ」の高橋秀夫さん、東京自由大学の松倉福子さんが、三省さんの詩を朗読した。続いてKOWさんと鎌田東二理事長による三省さんに捧げる歌。そして、念願だった李政美 (い・じょんみ) さんに参加いただき、ミニコンサートとなった。じょんみさんの歌手活動のターニングポイントであったという三省さんの詩「祈り」という曲は、今年の三省祭りの成果を天に届ける歌声であった。

また今回はWATERRASの空間を利用して、三省さんの全作品の展示や写真展を行うことにした。野草社の石垣さんに、全作品や写真を提供していただき、山尾三省記念会の手塚賢至さんに屋久島から来て



いただき、展示の全てを一手に請け負っていただいた。東京神田淡路町の高層ビルWATERRASの一角に、土や木々と同化してしまうような「愚角庵」の写真が壁いっぱいに貼りめぐらされ、写真や全作品、さらに超レアともいえる部族時代の雑誌まで展示され、特有な「三省空間」が立ち現われた。その手塚さんが、「愚角庵だより」に三省祭りについて書いて下さったので、ここに掲載させていただき、感謝に代えさせていただきます。

【三つの遺言、受容のゆくえ「三省祭り」に参加して】

手塚 賢至 (山尾三省記念会)

2014年11月16日、東京・神田のワテラスコモンに於いて「三省祭り〜蘇れ! 神田川の〈カミ〉の力〜」(主催:東京自由大学)が開催され、会場での展示を依頼され久々に上京することになった。想えば2008年「山尾三省生誕70年祭」の会場もこの界限だった。神田と言えば三省を育んだ故郷、人生揺籃の地である。今回の会場、ワテラスコモンもかつて三省が通った淡路小学校跡地の再開発地で人と地場の深い縁に導かれるような設定となっていた。3部構成の内、メイン会場は3階のホール。展示はホールへの短い通路の両側壁面の片側に写真と処女作から最新の出版に至る書籍を時系列にまとめ、片側に書斎、愚角庵の360度パノラマ写真、直筆原稿などを配して三省の全体像が解るように努めた。

会場には永年に渡り「三省祭り」を開催されてきた鎌田東二さんはじめスタッフの三省への親和性溢れる情熱が満ちていた。配布されたプログラムには一山尾三省の三つの遺言一が記載されている。2001年に詩人の純粋な直観から雄叫びのように放たれた遺言は人間と文明を直視し今も色あせることなく、逆に混迷を増すこの時代に希望の光のごとく投射されていると思う。神田川の水を飲める水に再生し、原発を廃し、日本国憲法第九条を世界の国々に普遍させる。2015年の現在、いずれも日本国民のみならず人類史の課題であり、賢しらな人間の意識と行動に関する不退転の覚悟を要す。人の意識次第で事はどちらにでも転換できるのだ。

今回メインテーマの神田川の水の再生は2部で陣内秀信さんが水都東京の大地と水の循環による大都市再生の可能性を説かれた。今、神田あたりで見る川面に誰も飲める水の可能性を感じないだろうが神田川の源流には天地の恵みである水がこんこんと湧いている。その水にカミを見るか、その清いカミを愛するか。そこに三省のいう文明の再生とアニミズムから導かれる希望があるだろう。

原発と九条は政治の荒波にほろろうされ、遺言の願いをなぎ倒すようにじわじわとなし崩されようとしている。フクシマの原発事故を顧みることなく再稼働、原発輸出へと強引に突き進み、憲法九条はさらに切迫の度を強め危機に直面している。自然と平和と何より命を尊び、戦争と殺戮のない世界造りこそが人類史の課題ではないか。まるで静かなファシズムが進行するかのような世相にあって三省の三つの遺言は私たちの行く手を照らす豊かな希望の灯だ。いずれにせよ人の意識のありようが世界を形作る。そして遺言の最後には一番肝心なことがそっと告げられる。それぞれが一人ひとりのやり方で世界を愛せと。市民運動も悪くはないけど豊かな個人運動を大切に生きて。希望のビジョンとして託された種子をどのように受け入れ育むのか、三省のメッセージはいまも私たちと共にある。「三省祭り」を2009年より継続されてきた東京自由大学に改めて感謝申し上げ今後「山尾三省記念会」との連携がより深く築かれることを願っている。



▲「WATERRAS」にて展示された、山尾三省さんの全作品と写真

2014年には、三省さんの友人であり、2011年の三省祭りのコメンテーターだった中野民夫さんが『みんなの楽しい修行：より納得できる人生と社会のために』を上梓された。この「より納得できる人生と社会」という表現は、三省さんの言葉であると聞いた。このように三省さんの生き方と言葉は多くの人の心にイメージーションとメッセージを送りつづけ、それぞれの人生の中で生きていることを実感する。

昨年のゲストだった鶴田静さんから届いたメッセージも掲載させていただきます。

2014 三省祭りの開催おめでとうございます。

三省さん、初めての出会いから、45年になりました。

長い月日ようですが、今に繋がっているの、決して長くはありません。

三省さんはたびたび涙を流されました。神田川の源ですね。

清い涙は清い川へ、そして海へと、屋久島の海へと続きます。

その川や海を私たちはけがしたくはありません。

ましてや放射能でとは、もってのほかです。

それからもう一つの遺言、「日本国憲法第九条」を守るということ。

「日本国憲法第九条」を白い薔薇の花だとなさいましたが、残念ながら、現政権の元で、萎れかかってしまっています。けれども私たちは「九条をノーベル賞に」と署名運動をし、今年の候補になりましたよ。

《件(くだん)の悪人たちに 高潔の匂い立つ白き薔薇 やすやす 手折らせることならじ……だ》

のお言葉を忘れてはいません。

お妹さん、詩人の長屋のり子さんは、

「世界が白い薔薇に満ちる日」を実現する決意を、

のり子さん自身が「白薔薇の青い萼を 支えつづけるもの」となって守ることを誓っていらっしゃいます。

私たちものり子さんと協働していきます。

三省さん、生命に満ちた世界をつくり、維持していくという課題を

私たちに与えて下さったこと、心より感謝いたします。

2014年11月16日

鶴田 静

最後に、三省祭り企画に賛同して下さったバタゴニア東京・神田、そして会場を提供して下さった安田不動産、(社)淡路エリアマネジメントの御協力にも感謝します。

2015年の三省祭りは私たち東京自由大学第一世代のフィナーレとして、三省さんの詩にとことんひたり、その響きを次世代に引き継ぎたいと思っています。

「人類の知の遺産(第IX期)」

第4講 9/27(土) 「ベルクソン」

講師: 鶴岡 賀雄 (宗教学者・東京大学大学院教授)

この哲学者晩年の宗教論を中心に、「ベルクソン哲学の現代的意義 (の有無)」について、と題して話が進んだ。1. ベルクソンはどのくらい「現代哲学」か? については、自然科学、社会科学、「社会の世俗化」を前提にしている。帝国主義～植民地主義～世界戦争を経験している。2. 近代西欧「哲学」の理念を信じ、西欧文明の伝統を信頼している。→「現代思想」の入口にはいる。が「ポスト・モダン」ではない。(自然科学の理解の限界、社会科学、歴史学の知識の限定)→「哲学者」としては不滅。ベルクソンはなぜ「神秘主義」と言ったのか? については「神秘主義」研究者の私見として、「謎」としての「神秘主義」とは、「神秘家～神秘主義」は「知性以上」であるから知性の水準に留まる者にとっては依然として「謎」として立ち現れる。神秘主義とは「謎の魅惑に引き込まれていくことを肯定すること」である。(謎を既知の枠組に還元しないこと)→「神秘主義」とは「根源への逸脱」であり「謎の謎としての肯定」である。次年度に予定されている「ベルクソンの哲学」の著者である、ドゥルーズの講座も併せて受講して理解を深めたい。



第6講 1/10(土) 「ミシェル・レリス」

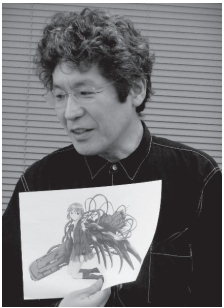
講師: 岡谷 公二 (フランス文学者・美術研究者・跡見学園女子大学名誉教授)

今年86歳になられるとは思えない、インテリジェンスとスマートが備わった風貌の先生はあるいはレリスと似ているのでは、と感じてしまう講義だった。レリスは、詩人であり、作家であり (告白小説でもない新しいジャンル) 美術評論家でもあった。画家アンドレ・マッソンらと反植民地主義を標榜していたシュルレアリスム運動に参加。「シュルレアリスム革命」誌に「語彙集、わたしはそこにわたしの註釈をつめこむ」等を発表した。既成の単語の一般的意味を解体し、音の類似や観念連合に基づく私的な観念によって語を再構成していく「語彙集」に見られる言語への特異な拘りは生連続いた。それゆえに彼には翻訳が困難なものが多い。つまり文学に対する関心よりも言葉に対する関心が強かった。自分だけの辞書のようなものを作り上げた。アフリカでの日誌を「幻のアフリカ」として公開。憑依現象、秘密言語、アフリカ美術の記述は圧巻。そして新しい文学のジャンルを創造した。このことは、ブルーストにも匹敵する偉業である。その後民族学 (エスノロジー、フランス人は文化人類学とはいわず) レジスタンス運動にも加わりジャコメッティ、ピカソ、ペーコン等と親交があった。戦後はサルトルやボーボワールとの交流も生まれた。「夜なき昼、昼なき夜」という夢の記述も代表作。これから、レリスの代表作「ゲームの規則」の完訳に挑戦なさるとい岡谷先生の意欲に脱帽。



主催ゼミ 大澤ゼミ「現代若者意識論」 12/5(金)

今、若者は冷遇されている。それを自覚していながら投票に行かない。低投票率が予想される総選挙を目前に、2冊の本を題材に若者の意識について話してみたい。まず『「メジャー」を生みだす マーケティングを超えるクリエイターたち』(角川Ioneテーマ21) 新書 堀田純司著エヴァンゲリオンなどの主人公は父親に認められたくて戦う。「自己承認の渴望感」があふれている。インターネット、ツイッターの文面にはちょっとしたことで、「死ね」「ちえ、自慢話かよー」とか、感情のベースにルサンチマン (嫉妬、怒み、憎悪) がある。犯罪被害者も自業自得と言われ、文句なしに不幸なことは、恋人や奥さんが逃げてしまうことくらいで、不幸な結末だけを持っている。ガンダムの時代は、部分としての自分が全体に役立っているという認識があったが、今の若者にはパーツを担っているという実感が無い。《世界》、別の世界へ行ってしまう。「あいつ、すごいらいげ」という存在意識のなかにいる。



講師: 大澤 真幸氏 (社会学者・元京都大学人間・環境学研究科教授)

第5講 11/8(土) 「ホワイトヘッド」

講師: 中村 昇 (哲学者・中央大学教授)

まず先生は伝記的なこととして、ホワイトヘッドの同時代人として、ジェイムズ、フロイト、ソシュール、前出のベルクソン、フッサール、シュタイナー、西田幾多郎、ラッセル、ウィトゲンシュタイン、ハイデガーを挙げ、国境を越えたその奇遇を紹介した。西洋哲学における彼の位置づけと影響と題して、話は進んだ。論理学・数学の世界で有名であったにもかかわらず、63歳過ぎから形而上学者となった。しかし、この19世紀から分析哲学・科学哲学という分野が成立、さらにニーチェの影響により、20世紀は反形而上学的潮流がヨーロッパを覆い、分析哲学からも伝統的哲学からも相手にされなくなってしまうところに位置づけの難しさがある。中期までの思想としては「数学原理」がある。記号論理学の金字塔 (アリストテレス以来の論理学の革命) であった。論理主義、公理主義、直観主義の当時の数学の考え方を一変させた。また、「自然の二元分裂」を批判し、「知覚された対象と自然科学で語られている対象のすべてとを包摂する関係の必要性」を説いた。後期の思想として、哲学は詩である、とした。これは、ベルクソンの「科学の確実性は虚妄だ」に通じ、科学や論理学の正確さというのは、その論理体系の正確さであり、対象そのものの正確さとは異なるからである。創造、神、世界の関係について、「始源に……創造活動があり、そこに神……が入ってきて、世界は活動しはじめる」「神が世界を創造するというのは、世界が神を創造するというのと同じく真実である。」「(過程と実在)」



第7講 2/14(土) 「二宮 尊徳」

講師: 鎌田 東二 (宗教学者、京都大学こころの未来研究センター教授、NPO法人東京自由大学理事長)

いまなぜ、小学校にある、薪を背負って旧来の道德、勤勉が売り物のような二宮金次郎なのか、という大方が感じる意外性を吹っ飛ばすような講座だった。本当の尊徳の教えは、至誠、勤勉、分度、推譲である。誠や勤勉は儒教的な徳目とも普遍的な生活倫理ともいえるが、特に次の「分度」と「推譲」は重要な思想・実践である。分度とは昔風にいえば「身の程を知る」ということであり、今風にいえば「サイズをわきまえて等身大で生きる」ということである。この天地自然社会の中での人間や自己の位置と小ささを自覚し、その身の丈に合った無理のない生き方を実直に創造すること。「推譲」とは「分度」を守り実践して得た利益・価値・資産を自分や他者や子孫の将来のために有効に生かすということである。今風にいえば「共助・シェアリング」の実践である。また、「天道」と「人道」との区別を明確にした。人は「天道」のままにしておくど「荒地」になるから「人道」の手が入らなければならない。経済というリアルと倫理や生き方という理念を結びつけた。そして「天理・天道」にまかせるのではなく、「人道」を尽し全うする。尊徳が力説したのは、人間社会に必要な「人道」の在り方である。時代遅れではなく、一週遅れのトップランナーであった。また現実理論をあてはめるのではなく、現場から物事を作り上げていく実践家であった。講座前日の上京時に新幹線の小田原で途中下車し、尊徳の生家などを取材するという鎌田先生の実践力にも驚かされる講座だった。



主催ゼミ 「モンゴル文化とシャーマニズム」

講師: アルタンジョラー (京都大学こころの未来研究センター・ワザ学共同研究員)

今年度の講座では、「歴史、風土や暦法のなかでモンゴル人の心と力の源を探る」ことにしました。■第一回 (10月24日) 「モンゴルの歴史に息づくアニミズム」モンゴルの最も古い文献である『モンゴル秘史』をもとにつくられた映画を観ていただきながら、主に13世紀における信仰のかたちを紹介しました。とりわけチンギス・ハーンの力の源となったとされる Tengri (天神) 信仰が、いまなおモンゴル人の日常生活のなかに生き残っていることの意味を伝えました。■第二回 (12月19日) 「モンゴルの風土、モンゴルの心」ホルチン地方のモンゴル人の「チーズの日」、「高い丘に登る日」などの慣習や民間に伝わる様々な「魂呼び」(失った魂を呼び戻す) 呪術について紹介しました。その際、所々とつ

くりや火などの道具を用い実際の作法を行ないながら説明しました。また、生き生きとした映像を通して、モンゴル語の歌やモンゴル人の日常生活の風景を満喫していただきました。第三回 (2月20日) 「モンゴルの暦法、ト占」まず、いわゆる西暦、旧暦や時輪暦などにかかわるモンゴル人の暦法に簡単に触れると同時に、民間に伝わる謎の図式と暦の関係を紹介しました。そして、モンゴル人ならではのいくつかの古い中から羊の踝の骨 (骨の四つの相:馬、駱駝、羊、山羊) を用いた占いをとりあげ、実物を手にとって占ってみるということを体験していただきました。



ト占に用いられる羊の骨▲

特別企画 馬頭琴コンサート&語り『スーホの白い馬』 11/21(金)

鳥飼 美和子 (運営委員長)

モンゴル文化とシャーマニズムのゼミに加えて、今年度はさらにモンゴルの響きを直に感じるような時間をもちました。会員の渡辺美美子さん、以前、講師でできていただいた女優・ストーリーテラーの古屋和子さんのご縁で、仙台在住の馬頭

琴奏者のバラヤトさんに演奏会をしていただき、それに合わせて、古屋さんが「スーホの白い馬」を語って下さると豪華版でした。モンゴルの草原を疾走する馬のいななきを聞いたような時間でした。



バラヤト氏 (馬頭琴)、古屋 和子氏 (語り)

コンテキストデザインワークショップ2014

上林 壮一郎 (運営委員)

2014年度は、2回ワークショップを実施した。1回目は昨年に引き続き、カフェを通して新しいライフスタイルを提案するワークショップ。テーマは小さな暮らしを希求する「スモールライフカフェ」。参加者各自のいつもの生活を振り返るところから始まり、小さくシンプルなライフスタイルを実践するカフェを企画しそれをカフェの看板を制作するところで完結する。2回目の超領域フェスタは昨年度の多彩な各々のパネラ

ーに紹介された新パネラー4名による超領域的トークセッションと、音楽と音と歌と料理のマルチセッション。サウンド・デザイナー岡田晴夫氏、セルビビルダー丹治源太氏、作曲家坂巻史和氏、漫画家ゆきち先生氏と多彩ながら共通点は領域を超えた新しいワークスタイル、ライフスタイルを実践する人々だ。今年も杉と地熱で暖かい建築家落合俊也氏の月舞台を会場にお借りし、刺激的な出会いと交流の場となった。



特別企画 大重潤一郎監督作品連続上映会

牧 優佑 (担当)



大重潤一郎監督

本年度の連続上映会は5回に亘り実施。上映作品は、若かりし頃の作品から最新作まで。(上映作品:「かたつむりはどこへいった」、「友よ! 大重潤一郎 魂の旅」「能勢」「黒神」「大台ヶ原 水と気」「水と風」「水の心」、「AIZU HOLIDAY」「縄文」「光りの島」「原郷ニライカナイへ」「久高オデッセイ2章」) 大重作品を初めてご覧いただく方から長年のファンの方まで多くの方にお越しいただいた。上映会では作品の上映に加えて会場の皆様と沖縄の監督をスカイプでつなぎ、トークセッションを実施。映画の感想や、監督による作品解説などを中心にした意見交換で盛況であった。●「友よ! 大重潤一郎 魂の旅」は、大重監督の旧知の仲である四宮監督の作品である。大重監督の語



四宮 鉄男監督、森田 恵子監督

りを中心にした記録映画だ。大重監督の世界観が、大重監督自身の熱い語りを通して心に響いて (迫って?) くる作品である。上映会では、四宮監督にお越しいいただきトークセッションを実施した。監督との様々な思い出を共有いただいた。●「縄文」は、縄文時代の人々の暮らしや世界観を四季折々の風景をベースに描いた作品である。「縄文」の上映会では、主演のJUNさんをゲストとしてお越しいいただき、当時の撮影の様子や、「縄文」への想いを語っていただいた。純さんは撮影当時、縄文人になりきるため、縄文人らしい服装で裸足で街を歩いていたとか。監督と純さんの映画製作への真剣な想いに思わず合掌である。大重監督の作品の多くが、美しい自然の風景をベースにした作品である。それは見る者の心に優しく響き、そして生きるパワーを与える、そんな作品であると思う。ご来場いただいた皆様に優しくもパワーを与えるそんな上映会を今後も実施していきたい所存である。現在編集作業中の最新作「久高オデッセイ第三部 風章」の完成が益々楽しみである。久高オデッセイシリーズの最終章である。どうぞ期待!



JUN氏

特別企画 東京の聖地01 ～ロシア正教会とニコライ堂～ 1/11(日)

志村 純 (運営委員)



講師: 井上 まどか氏 (清泉女子大学専任講師・近現代ロシア宗教史)

当日は天候にめぐまれた。御茶ノ水聖橋口前に参加者は集合し、ニコライ堂こと、日本ハリストス正教会の東京復活大聖堂に向かった。ニコライ堂の須永執事長がていねいな案内と解説をしてくださり、充実した見学を行うことができた。正教会では楽器を使用できないため、鎌田理事長の法螺貝は交渉の結果、建物内ではなく前庭で奉奏された。自由大学に移り、講師の井上まどか先生の講義となった。ロシア正教会の歴史と特徴、カトリック・プロテスタントとのちがいが、日露関係と日本ハリストス正教会の歴史、イコンの位置付けと意味、宣教師ニコライの生涯とその思想・日本観、建築としてのニコライ堂の特徴などをプロジェクターを

まじえわかりやすく講義してくださった。とりわけ、ニコライが明治初頭の日本の民衆の宗教について共感に満ちた見解を残しているということ、しかし日本の近代化による宗教性の喪失に警鐘をならしていたということなどは非常に興味深いところであった。オープンカフェでは、井上先生がわざわざロシアのジャムであるヴァレーニエを持ってきてくださっており、おいしくいただくことができた。参加者も27名と盛会となり、「東京の聖地」の第一回としても非常に有意義なものになったと思う。



▲ 左: 須永執事長